

相互インタビュー：自分と相手が応答するアクティビティ

実習科目「社会貢献活動」の中間期研修ワークショップを事例として

The reflective activity named “The Mutual Interview”
& workshop in the community service

東 宏乃

Hirono AZUMA

湘南工科大学

Shonan Institute of Technology

<あらまし> 湘南工科大学の実習科目「社会貢献活動1」では、中間期研修会をワークショップ形式で行い、前半の実習体験をふりかえり、後半の実習の目標立てを行っている。実習生はそれぞれ豊かな実習体験を得ていると思われるが、それを言語化するには何らかの手立てが必要で、その1つが、ワークショップによる実習生同士の対話である。昨年度より注目している手法に、相互インタビューと他己紹介があり、今年度は、7月と8月に行うワークショップから、相互インタビューを事例として、実習生同士の対話により体験が掘り下げられる様子について報告し、その有効性を論じる。

<キーワード> ワークショップ 質的研究 参加体験型学習 リフレクション 大学教育

1. 「社会貢献活動1」の中間期研修会

湘南工科大学では、共通教養科目（選択必修科目）として「社会貢献活動1.2」を設けている。いわゆるアクティブラーニングの学びであり、ここでは、実習体験を「ふりかえる」ことが必要になる。つまり、体験の意識化が重要なのである。

50時間の実習で2単位認定しているが、実習を15時間以上40時間未満行った実習生は、中間期研修ワークショップに参加することが義務づけられている。2007年度よりワークショップの手法は試行錯誤を続けてきた（*1）が、書くことに苦手意識のある学生層には、KJ法などより、対話を重視した手法が、体験の共有には有効であることがわかってきた（*2）。

実習テーマは30以上あり、分野は、教育・福祉・自然環境・ユニバーサルスポーツ・社会・工学的取組（情報・福祉ものづくり・社会・教育）と多岐にわたり、実習生個々人の能力の多様性ともあいまって、実習体験には一定の傾向はみられない。しかし、中間期研修ワークショップ（以下、WSと略記）で実習生同士が意見交換をすると、一様に、自分の体験を客観視した感想が出てくる。例えば、「今日は正直、自分の実習先のことがよくわかっていなかったの、井の中の蛙ではないですけど、自分の実習先のことしか知らなかったの、いろいろな人の話を聞いて参考になりました

た。今後、今日、交換した意見とか皆さんのお話を参考にしたいと思います。」（実習テーマ「辻堂 de ゆうゆう工作」のIK君、マテリアル工学科3年）などである。

2. アクティビティ「相互インタビュー」

WSのアクティビティ「相互インタビュー」は、次のような活動である。まず、WSの枠組みは、
(1) 今日のWSのゴール（目的）等の説明
(2) 導入の活動「四分割シートで自己紹介」
(3) ペア決め（機械的に決めることが多い）
(4) 相互インタビュー（10分×2回）
(5) 他己紹介（12人の場合一巡で25分）
(6) ふりかえり（12人の場合一巡で20分）
であり、「相互インタビュー」の問いは、

(Q1) 実習を通して学んだことの中で、あなたにとって、一番重要だと思うことは何ですか？

(Q2) 社会貢献活動を行う前と後とで、あなたが最も変化したと思う点は何ですか？

(Q3) あなたは、社会貢献活動1の後半で、やりたいことは何ですか？（後半の目標は何ですか？）また、どうしてそう思うのですか？

であり、この問いを2人1組で聴きあう。

3. 相互インタビューで引き出されたこと

2011年7月8日のWS（参加者8名）では、

おもしろい現象が起こった。WS の前と後とで、教育小目標 2 3 項目に関してピンとくる項目について記述してもらうテスト (* 2) をしているのだが、それを全く一文字も書けない実習生 S さん (情報工学科 4 年、女性、「葛川のクリーンアップ」) が居た。ふりかえりシートの今後の実習目標も白紙であった。これら 2 つの事実から判断すると、S さんがワークショップというプロセスの中で、全く学んでいないことが見て取れる。

しかし、ところが、彼女は WS の感想には、「インタビューされることで、自分一人では気付けない部分を引き出せてもらって良かった。」と書き、ある種の気づきがあったことを、しっかりと表明したのである。

S さんは、社会貢献活動を履修するときの応募動機や実習テーマ「葛川のクリーンアップ」を選んだ理由を書く登録票では、とてもそっけない表現をしていて、元々、作文は苦手だと言っていた。しかし、そんな彼女が、相互インタビューにより何かを引き出されたのである。(その何かについてはこれから本人にヒアリングする予定であり、詳細は学会発表の本番に期したい。)

インタビューした相方は、G 君 (情報工学科 2 年、男性「放課後キッズクラブ」) で、彼も相互インタビューについての感想には、

「相互インタビューがおもしろかった。相手の活動について、1 対 1 で話せたことが、1 人ひとりみんなの前で発表するよりも頭に入ってきてよかった。このような (相互インタビューの) 形の方がみんなの前を向いて話す (ワンサークル) より良い。」と書き、相互インタビューのおもしろさ、アクティビティの魅力に気がついている。

この 2 人の間に何かあったのか？ G 君が書いた相互インタビューのメモ書き (インタビューされた人 : S さん) には、

「A1 : 汚くなって臭い川を見て、自然を大事にすることが重要。地域一体となってクリーンアップをやることで、様々な人と出会い関係が生まれていくのがよい。地域活性のためにも。」

「A2 : 今まで無視してきた町に落ちているゴミに気がつくようになり、ゴミ箱があれば捨てるようになった。」

「A3 : 実習は後少しなので、今までと同じように取り組んでいきたい。そして、まだかわりをもていない人とも交流していきたい。」とあった。

そして、S さんは、中間期研修 WS の後に書くことを義務付けられている中間期レポートには、なんと、「今までの実習からあなたが学んだことを書いて下さい」という問 7 に、「自然が豊かだと人も豊かになる。」と書いたのである。とても、哲学的な答えではないだろうか？

作文が苦手な S さんにしては、びっくりするような、自己開示された答えになっている。

特に、本学は工学部だけの大学で、文章表現が苦手な学生が多い。そんな中、「人も豊かになる」という S さんの表現は光っている。これは、G 君との応答的なインタビューの効果が、後になって現れた好例といえよう。

このように、人はワークショップをきっかけにして変わるのである。国語的な作文指導はしてはいないが、いわば、ワークショップという場が、あるいは、相互インタビューというアクティビティが、実習体験を言語化することを助けているのであると言ってよい。

4. 体験の言語化とWSでの関係性

さて、相互インタビューを経て、個々人の実習体験が豊かに言語化されることがわかった。

S さんの、「自分一人では気付けない部分を引き出せてもらって良かった。」とは、いったい「相互インタビュー」の何がそうさせたのであろうか？ 考えられる要素としては、以下である。

(1) 2 人ペアというグループサイズの適正さ。つまり、聞きにくいことも、話しにくいことも、8 人が輪になった全体では話せないが、2 人というペアで話せるようになったことがわかる。

(2) 全く違う分野の者同士がペアになったことで、真剣に聴きあう関係ができた。実習体験が違う程、相手との関係をていねいに築きながら相互インタビューがなされたと推測される。

(3) 相互インタビューの、「問い」の内容が適切だったことと、インタビュー時間が 10 分と短い時間だったことが、WS に参加したペア 2 人を集中した関係性に導いた。

【文献】* 1) 東 宏乃・市山雅美、(2010) 体験を共有するアクティビティ「他己紹介」、日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集 p.529-530

* 2) 東 宏乃、(2011) ワークショップでひろがる学びのプロセス、教育 GP 成果報告書、湘南工科大学